様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ０２６８４

研究課題名（和文）遊びとの比較から見たアート教育の対話主義授業論的分析

研究課題名（英文）Dialogic pedagogical analysis of the art education in comparison with play activities

研究代表者
宮崎　清孝（Miyazaki, Kiyotaka）

早稲田大学・人間科学学術院・名誉教授

研究者番号：９０１４６３１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はバフチンに基づく対話的な教育･保育論の立場から、幼児のアート教育の特徴を探るために、幼児の想像遊びとの比較を行った。対話的な保育を行っている幼稚園での研究の結果、幼児のアート活動と想像遊びは、その対話性において基本的に同型だった。その基本的な構造は＜幼児－”作品”（アートの場合）あるいは想像世界（想像遊びの場合）－保育者（あるいはアーティスト）＞という三項関係を持っていた。いずれの場合も保育者（およびアーティスト）は、幼児の活動の対象に真剣に関わり、学び、面白がり、幼児の活動の中に潜在する新しい可能性に気づき、それを引き出し、幼児たちの活動が発展するのを助けている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
学術的には、関係が指摘されながら明確化されていない幼児のアート活動と遊び活動の関係について、より明確化できることが重要である。またそれを通して、これも一般的に重要だといわれてはいるがその意義が必ずしも明確でない幼児にとっての遊びの意味をよりはっきりとさせることで、幼児教育に明確な指針を与えることができよう。とりわけ、日本の保育の現状で無視されがちな、遊び活動での保育者の積極的な役割の重要性を示唆している点が重要だと考える。

研究成果の概要（英文）：This research compared children’s art and play activities to examine the characteristics of children’s art activities from the standpoint of dialogic educational view based on Bakhtin. Early childhood education and care activities in one Japanese kindergarten that has been developing dialogic practice were observed. The results showed that the dialogic structures are similar between children’s art and imaginative play activities: the triadic relationship structure between children, the objects of children’s activities, and the teacher/artist. In both cases, the adults engaged seriously and wholeheartedly with the objects of children’s activities, got interested in them, and learned a lot about them. Adults’ serious engagements with the objects of children’s activities made it possible for adults to discover new possibilities in children, to learn from them, and to help children develop these new possibilities.

研究分野：教科教育学

キーワード：保育　対話的教育･保育論　アート活動　想像遊び　保育者論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1, 研究開始当初の背景

申請者の本研究申請以前までの研究ではバフチン的な意味での対話論的な教育･保育において就学前の幼児のアート活動もより豊かに展開するのではないか、という仮説の元で研究をおこない、一定の成果を上げてきた（佐木&宮崎, 2015）。しかし、a, 本研究の対象園では幼児の想像遊びがアート活動と並ぶカリキュラムの二本柱であり、b, 本研究が最初から刺激を受けていたスウェーデンのLindqvist(1995)に端を発する Playworlds 研究が基本は遊びを中心とするものである、という 2 つの事実がありながら、本研究の中で幼児のアート活動と想像遊びの関係は申請以前まで研究の焦点となっていなかった。なお遊びの理論でも、アート活動との具体的な関係は明らかになってないのが現状であった（Sutton-Smith, 1997）。そこで今回は遊びとの比較でアート活動について研究することをテーマとした。

2, 研究の目的

本研究は、幼児教育でのアート教育の意義を、その対話構造を分析することで明らかにすることを目的とする。その際、アート活動の特色をみるために、幼児教育で重要な幼児の遊び活動とそこでの対話構造との比較をおこなう。そのために、本研究では対話的な教育・保育をおこなっていると判断される日本の一幼稚園での保育活動を、主要な研究の対象とする。

ここで「対話的な教育･保育」とは理論的にはバフチン的な意味での対話的な教育･保育論 (バフチン, 1995; Matusov, 2009)を意味する。これ自体はアート教育に限らず、また幼児教育だけのものでもない。しかし自らは自覚していなくてもこのような考え方に立つ幼稚教育、アート教育は存在しており、そこでの遊び活動の性質も含めてそれを理論的に明確にしていくことが本研究の目的である。

より具体的には以下 3 つの下位目的がある。

①一般論としての対話的な教育･保育理論の枠組みをさらに洗練していく。

②対話的な保育のもとでの幼稚園におけるアート活動のあり方を、これまでの研究に基づきさらに分析していく。

③今回の中心的な目的として、対話的な保育の元での幼稚園における幼児の遊び活動について詳細な分析を行い、それをアート活動の場合と比較していく。

3, 研究の方法

(1)下位目的①については、文献的な研究と共に、欧米の対話的教育論研究者との交流を行い、理論的な枠組みを洗練していく。なお、幼稚園、アート教育場面以外での授業実践の観察、分析も行う。

(2)下位目的②③について、主要なデータ源として研究者が対話的な保育を行っていると考える、アートに深い関心を持ち､他方想像遊びをもう一本の柱とした実践をおこなっている岐阜県下の幼稚園の保育を観察する｡また欧米の協働している研究者の研究対象としている学校も訪問し、観察する。

研究成果

(1)対話的な教育･保育論の構築

以前からの研究をさらに進展、洗練させ、業績欄にのせた成果（英文論文 2, 英文著作共同執筆 1）をあげることができた。この理論枠組みは研究者が、日本の教育･保育関係者が発展させてきた実践知と、ロシアの対話の哲学者バフチン（1986. 1995）の思想を関わらせることで展開したものである。以下、一般的な教科学習を例としその概略を述べる。

ここでの対話的な教育・保育論とは、大人（教師･保育者）が対話的な存在として子ども（生徒･幼児）と関わることで、子どもが自分の中に潜在的にもっている学習材料についての問いや考え方を引き出し、それを大人やほかの子どもの問いや考え方と関わらせる経験を持つことで、学習材料についてのわかりを、自分のものとして納得しつつ豊かにしていくことができるという考え方である。

ある学習材料に対面したとき、人はそこまでの生育史の中で、その学習材料に関連する知識を集積しており（history of personal understanding　わかりの履歴）、それに基づいて学習材料を探ろうと、無自覚的にではあるが問いを持つ。それはその個人にユニークなもので、他の個人、たとえば教師、保育者の持つ問いとは異なる。教師･保育者にとって子どもの考えが誤っている、浅い、と感じられるとき、実は子どもが異なる問いを持っていて、その問いからはその考えは正しい、ということがある（バフチン, 1988）。

ここで教師･保育者が子どもの中のその問いに気づくことができ、それを子どもたちに返してやることができると、子どもは自らの問いを自覚し、また他の子どもの問いとの関係にも気づき、自分の「わかりの履歴」を基盤として学習材料についてのわかりを豊かにすることができる。

子どもの問いの聴き取りができるためには、教師･保育者は学習材料について一人の大人として、本気で学び、新しい問いを発見しようとすることが必要である。ここから、対話的な教育･保育には＜子ども―学習材料―教師･保育者＞の三項関係があり、教師･保育者は、子どもと同様に学習材料に本気で関わる者として、子どもと対話的に関わることができる。また教師･保育者は子どもの問いを聴くことで、彼等自身の学習材料についてのわかりを深めることができる。幼児が一方的に教師･保育者から学ぶのではなく、教師･保育者の側も子どもから学ぶところが、この関係が「トピックの真理性について参加者が対等の権利を持つ」（バフチン、1995）対話的であることを示す。

（2）対話的な保育のもとでの幼稚園におけるアート活動のあり方について

これについては、前回の研究計画で大きく進展し、今回はそれに新しい材料（特に 2018,2019 年度のデータ）を加えてさらに理論的に洗練させることができた。その結果は業績欄に載せたいくつかの国際学会で、また欧米の共同研究者との共著論文で発表した。以下、(1)に述べた対話的な教育・保育論が、幼稚園でのアート活動ではどういう形で現れるのか、という観点から理論的考察の主要な点をまとめる。

ここで展開している対話的な教育･保育論は、正しい結論に到達するための議論の仕方を教える、といったものではなく、各個人がそこまでの個人史の結果としてもっているユニークな、しかし自覚してない考え方を教師･保育者が引き出し、それを他の子どもたちの考え方と関わらせることで発展させようとするものであり、アート教育の場でも働いていた。

ここでの三項関係は、基本的には＜幼児–“作品”–大人＞である。ただし、大人の代わりに（あるいはそれに加えて）ほかの幼児が加わったり、あるいは最初の幼児と同一人（ただし異なる時点での）が入る場合がある。第三項の”作品”は二重性を持ち、一面では実体的な”物”（作品の材料。たとえば粘土の固まり）であり、他面、それに込められた”意味“（たとえば”虫”）である。ここで製作とは、ある思い（”意味”についての）を持ちながら”物”を変形していくことである。しかしここで変形された”物”の上に、予期していなかった新しい”意味”が発見される場合があり、それにより作品を作っていく方向性が変わっていくことがある。この発見を本人が行おう場合、、また他人、保育者やアーティストが行う場合があるが、どちらにしてもこれがアート制作における対話性である。

またアート活動の場面でも大人（保育者およびアーティスト）は、幼児の”作品”、またそれに関わ

る世界に、本気で関わり、学ぶことが必要だし、行われている。たとえば夏のワークショップで何を作るのか、という点についてのアーティストの提案も、幼稚園側は幼児向けの水で薄めたものではなく、そのアーティストがプロとして行っている本物の仕事を幼児たちにぶつけることを望んだし、また実際たとえば2018年度では「心に潜む虫を標本にしていく」活動をしている川越ゆかりが「心の虫」（ある自分の思いを虫の形で表す）の制作を提案し、幼児たちはそれに熱中していた。

(3) 対話的な保育のもとでの幼稚園における幼児の遊び活動について

本研究計画では、特にこの部分についての実証的なデータ分析と理論作りを重点的に行った。結果をまず総括的に述べておくと、対象幼稚園のクラスで行われる想像遊び構造は、アート活動の場合と対話的という点で非常に同型的であった。まず、想像遊びでも＜幼児（たち）―想像世界―保育者＞間の三項関係の構造があった。第三項は、”物“（大きなブロックの集まり）と”意味”（研究所）という二重性を、アート活動の場合と同様に持っていたが、個々の作品、事物、出来事に留まらず、複数のそれらが意味的に関連していて、”世界”というべき性質を持っていた。

またここでも、保育者は幼児たちの想像世界やそれに関わる材料について、本気で面白がり学んで、そこから新しい提案をおこない、また幼児の遊びに関係する行動がもっている意味を読みとり、拡大して幼児たちに提案していくことが重要で、それにより幼児たちの想像世界は広がっていった。以下、その中身について2019年度の事例を用いつつ、やや詳しく説明する。なおこの部分についての結果の報告は、業績にのせた国際学会などで発表している。また欧米の研究者との共著（著作）を準備中である。

①想像遊び展開の事例・2019年度前半の場合

対象とする幼稚園では毎年度始め、その年度のアート活動や想像遊び活動のヒントとして、年間テーマを設定する。この年は「水、ドロ、空」であった。この抽象的なテーマから、各クラスの幼児たちが自分たちの熱中できる具体的なテーマを発見できるように、各クラスの担任は関連すると思われるさまざまな材料（絵本、図鑑、写真など）を幼児たちに提供していった。研究の対象とした年長一クラスでは、幼児たちはなぜか雲に興味を示し始めた（5月）。

ここで保育者の示唆を受けて、幼児たちは保育室内にブロックで「研究所」を作り、自らは「雲研究員」となり、「カメラ」や「虫眼鏡」などの研究道具を使って（実際の空にある）雲の観察を始め、毎日見た雲の名前を記録したりした（5月後半）。

雲の中でも幼児たちは入道雲に大きな関心を持った。6 月始め、ある機会に保育者が入道雲の写真を見て、その形から思いつき「中に何かいそうだね」といってみると、幼児たちからそこに龍がいる、という話が出てきた。この雲は入道ドラゴンと呼ばれるようになり、この後夏休みまで、入道ドラゴンについての物語が少しずつ展開していった。たとえば自分たちは入道ドラゴンを直接見ることができないが、床に「爪痕」があるから、夜きているに違いないと、ドラゴンが出現して幼児たちの想像世界に時間性、物語性が生まれた。

②想像遊びを援助する対話的な保育者の仕事

この事例で、対話的な保育者の仕事をいくつか見ることができる。ここでは最も重要な2点を挙げる。一つは、最初の時点で保育者が、幼児たちが興味を持つだろう話題をいろいろ探していることである。年間テーマを手がかりに、自分自身興味関心を持てるような話題を、絵本、図鑑という形でい

ろいろ探し、それを幼児に提案している。ここでは教師が本気になって、想像世界のための材料を面白がり、探している。探した物のすべてが幼児たちに受け入れられるわけではない。この事例でも、保育者は一時、「水の循環」に興味を持ち、調べて幼児に提案してみた。しかしこれは、雲の種類と異なり幼児に選ばれなかった。

もう一つは、幼児が興味を持った入道雲について、「何かいそう」と感じ、それを提案してみたところである。ここで保育者は、幼児の示した入道雲への関心の中に潜在的にあった思いの可能性を聞き取ることができた。そのために、それを幼児に提案すると、「龍がいる」と、保育者の予想を超えた考えが出てきた。このような聴き取りが可能になったのは、保育者が本気になって幼児の雲の世界と関わり、雲について学んでいたからだ。と同時に、「何かいそうだ」という保育者の発見、「龍がいる」という幼児の展開が、保育者にとって雲の世界について幼児から学ぶ機会となっている。

幼児の側からすれば、このような保育者の援助に支えられて、自分たちの中に潜在的にあった思いを、保育者からの提案と関わらせて、さらに発展させて想像世界を作っていくことができる。これが、ここでの想像遊びが対話性を持っていることをよく示している。

バフチン, M. M. (1995).　ドストエフスキーの詩学. 筑摩書房.
バフチン, M. M. (1988).　ことば・対話・テキスト.　新時代社.
Lindqvist, G. (1995). *The aesthetics of play: A didactic study of play and culture in preschools*. Uppsala University.
Matusov, E. (2009). J*ourney into dialogic pedagogy.* NY: Nova Science Publishers.
佐木みどり・宮崎清孝(共編) (2015).はっけんとぼうけん：アートと協働する保育の探求. 創成社.
Sutton-Smith, B. (1997). *The ambiguity of play.* MA: Harvard University Press.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 Miyazaki, K.	４．巻 11(3)
２．論文標題 Questioning in Bakhtinian dialogic pedagogy and argumentation theory.	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Dialogic Pedagogy: An International Online Journal	６．最初と最後の頁 42,64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5195/dpj.2023.544	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Ferholt, B., Lecusay, R., Rainino, A., Baumer, S., Miyazaki, K. Nilsson, M. & Cohen, L.	４．巻 17(3)
２．論文標題 Playworlds as Ways of Being, A Chorus of Voices: Why are playworlds are worth creating?	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Cultrual-Historical Psychology	６．最初と最後の頁 95, 103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.17759/chp.2021170313	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Miyazaki, K.	４．巻 7
２．論文標題 Dialogic lessons and triadic relationship among pupils, learning topic, and teacher.	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Dialogic Pedagogy: An International Online Journal.	６．最初と最後の頁 58,87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5195/dpj.2019.239 2019.7	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 Ferholt, B., Lecusay, R., Rainio, A., Miyazaki, K., Cohen, L., Watanabe, R., Avramovic, M., Partanen, A., & Taylor, S.
２．発表標題 Playworlds as ways of being, a chorus of voices: A Multimodal discussion about why playworlds are worth creating.
３．学会等名 The 9th Nordic-Baltic ISCAR 2022（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 佐木みどり・畔上一康・野口紗生・佐木彩水・宮崎清孝
２．発表標題 子どもにとって「楽しい」遊びや活動にするために－アートに取り組む子どもの姿から
３．学会等名 日本保育学会第74回大会.富山大学（online開催）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Miyazaki, K.
２．発表標題 Teachers as the listener to students’ questions
３．学会等名 17th International Bakhtinian Conference. Saransk, Russia(held online)（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Ferholt, B., Lecusay, R., Miyazaki, K., Nilsson, M., Noguchi, S., Rainio, A. P., & Watanabe, R.
２．発表標題 Playworlds as ways of being: A chorus of voices
３．学会等名 6th Congress of International Society of Cultural-historical Activity Research. Natal, Brasil(held online)（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 渡辺涼子・宮崎清孝・野口紗生・庄井良信・横山草介
２．発表標題 想像遊びの協働的構築におけるナラティヴの意味-Brunerのナラティヴ論を手がかりに
３．学会等名 日本発達心理学会第33回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Ferholt, B., & Miyazaki, K.
２．発表標題 Teachers and researchers identifying new questions by listening to student and teacher responses: Lessons from teachers in the United States and Japan.
３．学会等名 The 41st Annual Ethnography in Education Research Forum（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Miyazaki, K.
２．発表標題 How artists and teachers are in the classroom with children: In a case of a Japanese preschool.
３．学会等名 American Educational Researchers Association 2018 Annual Meeting（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 宮崎清孝・佐伯胖・茂呂雄二・畔上一康・鈴木忠・諏訪正樹
２．発表標題 大会委員会企画シンポジウム・二人称教育･保育研究は発達心理学に何を示唆するか
３．学会等名 日本発達心理学会第30回大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Miyazaki, K.	４．発行年 2020年
２．出版社 Abbington, Oxon: Routledge	５．総ページ数 11
３．書名 How dialogic teachers create the dialogic classroom: Lessons from Japanese teachers. In Mercer, N., Wegerif, R., & Major, L. (Eds.). The Routledge International Handbook of Research on Dialogic Education.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	City University of New York, Brooklyn	University of Delaware		
フィンランド	University of Helsinki			
スウェーデン	Stockholm University			